

使徒言行録 第13章1～3節

使徒言行録9章で、エルサレムじゅうのクリスチャンを捕まえたサウロは、さらに多くのクリスチャンを捕まえるためにダマスコへと向かいます。その途中、光の中でイエス様と出会ったサウロは、三日間、目が見えなくなり、飲み食いもできなくなります。そのサウロを助けたのがアナニアというキリスト者でした。サウロの悪行を聞いていたアナニアは最初サウロを助けることを拒否しますが、神様はそんなアナニアにこう告げるのです。

「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう」。やがて偉大な使徒パウロとなるサウロに、神様は3つのことを語られます。サウロがキリストの名を伝えるための器として神様から選ばれたこと、キリストの名は異邦人や王たちに伝えられること、サウロがキリストの名のためにどんなに苦しまなければならないかということ。この言葉のとおり、サウロは使徒パウロとなって、異邦人や王たちに御言葉を告げる神の器として用いられ、そのために大きな苦しみと痛みを背負うのです。サウロはそのために選び出され、アンティオキア教会でその特別な働きのために備えのときを持ちます。このサウロを見出し、アンティオキア教会で一緒にその働きを担ったのは、エルサレム教会から送られてきたバルナバでした。彼らは1年もの間、アンティオキア教会で働きます。そのくだりは、先週の礼拝で聞いたとおりです。

パウロにとって、アンティオキアの1年間はとても大事なものであったのでしょう。パウロはもともと、優れたユダヤ教の教師でした。フィリピの信徒への手紙3章5節以下にはこう記されています。新約聖書364ページです。【わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。】神への信仰の熱心さ・忠実さから、イエス様を偽物と思い、クリスチャンを捕まえては牢屋に入れていったサウロは、その熱心さのあまり、どちらかというと非常に狭いものの味方をする人だったのだらうと思います。自分がこうだと思い込むと、それに向かって一直線に進んでいく。エルサレムのクリスチャンを捕まえ終わったサウロが、その次にダマスコの町のクリスチャンを捕まえるために出かけて行ったのも、そんなことの表れかもしれません。そんなサウロは、神様の器として整えられるための準備期間が必要だったのです。1年の間、サウロは彼を見つけ出してくれたバルナバと共にアンティオキア教会で働きます。サウロにとってそれが備えの時でした。アンティオキア教会はさまざまな国の人たちが集まり、礼拝をしていました。そこでは、ヘブライ語の礼拝だけではなくギリシア語の礼拝も持たれていました。文化が違う人たちが集う礼拝は、それまでサウロが経験してきた伝統的なユダヤ教の礼拝からはとてもかけ離れたものだったことでしょう。それまで聞いたことのないようなリズムやメロディの讃美歌。見たこともないような形の礼拝。服装も自由に着飾り、それはきっと、伝統的なユダヤ教の礼拝とはまるで違っていたのではないのでしょうか。ユダヤ教の格式のある伝統的な礼拝を知っていたサウロは、アンティオキア教会での礼拝をどんな思いで見いていたのでしょうか。ユダヤ教の教師ラビとしての教育を受けてきたサウロは、イスラエルの成人男子だけが受けることのできた格式ばったユダヤ教の礼拝のかたちから解放される必要がありました。そのた

めの備えの期間が、異邦人がたくさんいて、異邦人礼拝が行われていたアンティオキア教会の1年だったのです。サウロは彼を見出してくれたバルナバと共に、アンティオキア教会で丸1年過ごしました。そのような準備の時を経て、サウロとバルナバはアンティオキア教会から送り出されていくのです。

今日の聖書の箇所2節では、アンティオキア教会の人々が主を礼拝し、断食していると、聖霊がこう告げます。「さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出さない。わたしが前もって決めておいた仕事に当たらせるために」。そうやってバルナバとサウロは手を置いて祈られ、アンティオキア教会から旅立っていくのです。

ここで大切なことは、バルナバとサウロの二人を選んで送り出すのはアンティオキア教会ではなく、主なる神様だということです。バルナバとサウロの働きは、主なる神様の働きなのです。そしてそのためにアンティオキア教会の人々は、手を置いて祈り、送り出します。手を置いて祈るということは、送り出す側が送られる二人と共に連帯し、どこに行こうともこの二人を祈り支えていくという思いを表わしています。

詩編121編には、都に上るために旅立とうとしている人が、目の前にある大きな山に恐れを抱く様子が記されています。旧約聖書の968ページになります。1節以下には、旅立つ人の不安な思いとそれに対する確信が語られています。「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る、天地を造られた主のもとから」。自問自答するように、不安の中でそのように語る旅人を送り出す人たちは、次のように祈りを重ねます。3節、「どうか、主があなたを助けて、足がよろめかないようにし、まどろむことなく見守ってくださるように」。そして送り出す彼らは、イスラエルの神様が旅人を見守り続けるお方であることを確信します。4節、「見よ、イスラエルを見守る方は、まどろむことなく、眠ることもない。主はあなたを見守る方、あなたを覆う陰、あなたの右にいます方。昼、太陽はあなたを撃つことがなく、夜、月もあなたを撃つことがない」。そして再び、送り出す人たちは旅人の安全を祈るのです。7節、「主がすべての災いを遠ざけてくださり、あなたの魂を見守ってくださるように。あなたの出で立つのも帰るのも、主が見守ってくださるように。今も、そしてとこしえに」。

今日の聖書の箇所では、手を置いて祈ってバルナバとサウロを送り出したアンティオキア教会の人々は、バルナバとサウロの福音宣教の働きを、彼らだけに任せたのではありません。祈り続け支え続け、そのようにしてアンティオキア教会もまた、彼らと共に主の宣教の業を行ったのです。

私たち家族が、この神戸西教会に赴任して10ヵ月が経ちました。ようやく10ヵ月が過ぎたのか、それとももう10ヵ月も経ったのか、感じ方は人それぞれに違うことと思いますが、昨年11月30日に行われた牧師就任式の際、教会の役員のみなさんが私に手を置いてくださり、就任式に参加されたみなさんで手をつないで、按手祈禱をしてくださいました。そして、牧師就任の際になされる按手の祈りには3つの意味があるということ、就任式の前に一緒に学びました。一つ目は、「働きの委託と委任」です。神戸西教会の牧師として就任した私に、宣教の努め、すなわち説教、礼典、牧会を委託し、委任することです。二つ目は、「祝福と協働」です。神戸西教会のすべての教会員が、牧師の働きが守られ祝福されるように祈りつつ、共に教会の業に参加していくことです。そして三つ目は、

「協力伝道と世界宣教への派遣」です。この神戸西教会が招聘した牧師の召命が、この神戸西教会に限られたものではなく、連盟諸教会・伝道所、さらには世界宣教へと召されていることを常に覚え、主の導きに従うことです。この按手の祈りの3つの意味、「働きの委託・委任」、「祝福、協働」、「協力伝道・世界宣教への派遣」という3つの意味については、昨年私が赴任した際に確認したものではなく、前任者の松本牧師が24年前に就任した際に定められ、確認されたものをそのまま用いたものです。ですから、この神戸西教会の按手祈祷における理解は、宣教の努めを主に牧師に委託し委任すること。しかしそれは、牧師にすべてを任せっきりにするのではなく、牧師の働きが守られ祝されるようにと教会員が祈りをなしつつ、牧師と共に教会の福音宣教の業に携わっていくこと。しかもその福音宣教の働きは、この神戸の垂水の地においてだけではなく、日本バプテスト連盟の諸教会・伝道所との協力伝道や世界宣教まで広がりを持っているということなのです。これらの意味を込めて、按手の祈りに手をつないで共に加わったみなさんは、このことをいつまでも覚えつつ、共に働いていかなければなりません。今日の聖書の箇所に出てくるアンティオキアの教会の人たちも、そのような思いを持って、バルナバとサウロに手を置いて祈り、二人を送り出したのです。それは決して二人だけに世界宣教の働きを託すというのではなく、送り出した側も、常に祈りつつ、送り出した二人を物質的にも精神的にも支えながら共に働いていく姿なのです。詩編121編において、都に上る旅人を送り出す村の人たちも、まどろむことなく、眠ることもないイスラエルを見守る神が、あなたを見守り、あなたを覆い、あなたの右にてくださるから、昼でも太陽はあなたを撃つことがなく、夜も月があなたを撃つことがないから、安心していきなさい、と励ましつつ、こう祈るのです。

「主がすべての災いを遠ざけてくださり、あなたの魂を見守ってくださるように。あなたの出で立つのも帰るのも、主が見守ってくださるように。今も、そしてとこしえに」。

私たちもこのように、互いに祈り祈られつつ、共に働いていくことができるように、共に福音宣教の業に励んでいきたいと願います。

お祈りしましょう。